

# だれが作ったの、この漢字

私たちが日常使っている「漢字」はみんな漢字で中国製と思っている人がいたら悔い改めなければならぬ。

と言ってもその「漢字」は本物の漢字と取り混ぜて使用するのだから「漢字に類する文字」であることには間違いない。ただ作られた地域が違う。その地域は日本、「made in japan」なのである。これらを「国字」または「和製漢字」と呼んでいる。

それからもうひとつ、同じように「漢字」にない字形を作ったはずの「国字」なのだが、結果は漢字と同字形になってしまったものがある。それらを「国字」というにはおこがましいので、先行する漢字に敬意を表し日本では別な意義として使用しているという意味で「国訓」という言葉で表現している。

「国字」であるが「鯨・鱈・甕(日本では kg、中国では kW)」などは今では中国でも使用されている。しかし国字・国訓は基本的には日本でしか通用しない「準漢字」なのである。

「そんなことどうでもいいじゃん、漢字と思えばいいんだろう」。まあそういわずに聞くだけ聞いて。結構楽しい話かもしれないのだから。

## 1. 国字

国字は採取されていないものを含めなくともかなりの数になる。JIS-X0208 の第 1・2 水準の中にでさえ 180 字弱ある。すべてをご紹介するのは紙面の関係でむずかしいので、馴染みの深い文字をご紹介する。

政令文字である常用漢字の中の国字 (6 字)

込(こむ), 働(はたらく), 峠(とうげ), 畑(はたけ), 刃(もんめ), 枠(わく)

政令文字である人名漢字の中の国字 (4 字)

笹(ささ), 凧(なぎ), 柁(まさめ), 磨(まる)

その他の国字 (一部: JIS-X0208 収容)

俣(また), 俤(おもかげ), 俤(くるま=人力車), 凧(たこ), 凧(こがらし), 匂(におい), 坏(あくつ), 嬬(かかあ), 鰯(いわし), 柘(とち), 桮(ふもと), 榎(くぬぎ), 榊(さか)

き), 鱈(きす), 鱈(たら), 鯰(なまず), 鮠(えび), 鰯(あさり), 鱈(かずのこ), 鮎(かじか), 鰻(おろし), 鰻(ゆり), 鰻(かすがい), 辻(すべる), 辻(つじ), 躰(しつけ), 襖(つま), 鮎(はい), 鱈(そり), 鱈(すい), 腺(せん), 癌(がん), 畑(はたけ), 筆(むしる), 榎(かし), 砲(トン)

国字についてはいくつか辞典が刊行されているので、個々の文字に興味をお持ちの方はそちらをお読みいただきたい。大きな書店の辞典売場に置いてある。

## 2. 国訓

上でお話したように、日本人が漢字にない意義や名称を独自性の高い字形で国字として表そうとしたが、結果は漢字に存在していたという文字である。

ある人が「ツバキ」を漢字で書きたいと思った。しかし考えてみたら日本原生種のこの木に漢字はない。では自ら作ることにして、ツバキの特性は何だろう、第一に「木」であるから扁は「木扁」。次なる特徴は花の色、あるいは咲く時期、etc.

日本で花の少ない冬から初春にかけて、あでやかな花をつけるこの木はまさに春の花であろう…。よって旁は「春」。以上から「ツバキ」は「椿」。しかし待てよこの字はすでに漢字にあったな。ちなみに「椿」の中国語での意味は「霊木」または「センダン蚊の落葉高木、チャン」である。

いいや、中国人が読むわけでもなし、日本人相手だから。といったかどうかは別にして「椿」と書き綴った。これで一丁出来上がり。

ためしに同様に旁が「春夏秋冬」である文字を見てみると、次の通りである。

「榎」 中国語では「ひさぎ、ノウゼンカツラ科」

日本語では「えのき、ニレ科」

「楸」 中国語では「榎」と同じ「ひさぎ、ノウゼンカツラ科」

日本語でも「ひさぎ、ノウゼンカツラ科」。

日本で秋の木と言うと目につくのは「もみじ」であろうか。「もみじ」は色を強調した「木扁に色」「木扁に丹」「木扁に花」「木扁に赤」などが「国字」で作られている。「楸」は特に「日本訓(国訓)」を持つ必要はなかったのだろう。

「柊」中国語では、芭蕉に似た木

日本語では「ひいらぎ」

その他 JIS-X0208 の中で国訓のある文字を次表に挙げておいた。

	日本での意味	本来の意味		日本での意味	本来の意味
澗	とろ	浄と同字	緝	かすり	縞模様
茸	きのこ	茂る	杭	くい	船で渡る
釦	ぼたん	金属で器物の口や縁を飾る	柏	かしわ	常緑樹の総称
霰	しずく	(意味不明)	棕	たら	シュロ
鮎	あゆ	なまず	楨	まき	こずえ
蒔	まく	植える	侘	わびる	誇る

### 3.なぜ国字が必要だったか。

なぜ日本人は国字を必要としたのだろうか。平仮名・片仮名で書いてしまえばよかっただろうに。でも大別して次の2点がその理由であったらと思う。

日本語は記述上英語やハングル(韓国語)のように単語ごとにスペースを空ける「分かち書き」をしない。分かち書きをせず、すべてを仮名で書いたら言葉の区切りがわかりにくい。

「弁慶が長刀を持って」が「弁慶がなギナタを持って」になってしまう。これを補うのが漢字仮名混じり文といわれている。この時さらに固有名詞はできるだけ漢字にしておいたほうが認識度が高まる。漢字によって単語の切り方が明確になるということである。

ところで、日本語の概念を表す漢字がないものがある。

人力車「俥」・とちのき「柝」・かじか「鮎」・しつけ「躰」など

これらの概念を示す漢字が必要だった。

また、漢字に意義の相当するものがあるが、大和言葉でその義を示す言い慣らされている「音」があり、その音を取り込んだ字形がほしかったものがあった。

日本語の「つま」は「詰まるところ」つまり「へり」、あるいは「つまむ」。漢語で衣服の「おくみ」を「衽」というが、和服の「つま」は「おくみ」の腰から下の部分。ほぼ近いのだから「衽」でもいいじゃないかと思うのだけど。愛妻家が多いのも知れないが、刺身の「つま」だって「妻」と書きたがる国民性なもので、こりゃ「つま」は是非「妻」を含まなくて

はとなったかどうかは定かではないが。

文化人の趣味・遊びとでも言うもので、江戸期には大名のたしなみとして国字をつくる事が流行したことがある。中には言葉遊びであると思えない造字がある。

湿地帯を示す言葉で「ヤチ(=谷地)」があるが、この意義を表す国字に「菴」がある。これは常陸宮妃殿下華子様の先祖である津軽藩主が作られた文字である。

「孀(かかあ)」は鼻につく女である。

「忪」は平常心を長く維持するという意味だろうか「こらえる」という意義である。

「舟偏+雪」=そり、「魚偏+雪」=たら、「木偏+雪」=たらのき、など旁が「雪」の文字3種。「そり」はそのままの形と機能から、「たら」は取れる時期の気候、「たらのき」は魚の「たら」から派生したものだろう。

### 3. 造字法

国字の造字法には2種ある。

ひとつは漢字の造字法である六書(象形・指示・会意・形声・仮借・転注)のうち「会意」で構成するものである。国字の場合それぞれ意味を持つエレメントを組み合わせて新しい意義を作る「会意」が圧倒的のようだ。このエレメントに何を選ぶか面白いところで、蘊蓄のあるものから、駄洒落の域を脱しないものまで千差万別である。

女偏+雷 = 媼、おんななるかみ

手偏+耑 = 搯、むしる

木偏+神 = 神、さかき

木偏+仏 = 榊、しきみ

穴冠+臭 = 窠、へ(屁)

木偏+一 = 杓、ほだ(焚き火をする木の切れ端)

丸の下に雪 = 霽、あられ

工偏+刀 = 切、切は旁が「すき」であり、「すき」お百姓の持つもの。武家の出の場合「刀」がふさわしい。人名用。

虫偏+老 = 虻、えび、腰が曲がっているから、旁は「老」。

草冠+枕 = 蓐、つかれる。旅の最中、疲労困憊すれば草枕もするだろう。

もうひとつは、本来の字形を楷書・行書・草書で書いた字形を独立したものと捉えるものである。例えば草書の書き方で書かれた字形を、楷書や明朝などの活字体でデザインしなおしたものであ

る。

「𦉳」 = 喜、喜の草体

「𦉳」 = 柳、柳の草体

「𦉳」 = 岡、岡の草体

「𦉳」 = 崎、崎の行書体

この手の文字は特に人名用としては個人のアイデンティティを印象付ける方法として根強い人気を持っている。

中国では漢字という文字が固定化してから地域的に多くの国が並立して存在した。またその支配者・国民がすべて漢民族だったのではない。漢民族が全土を把握したのは漢・宋・明くらいだろう。民族による、地域による習俗の違い、政治的配慮などから同じ音・義でありながら異なる形の文字が多く発生した。

現在、一応オーソライズされている漢和辞典は「康熙字典」で、この辞典に掲載されている文字が正字体（必ずしも正しい解釈をされていないという評価がある。さらに康熙字典には版本が多く、版本間で字体に混乱がある。）とされている。この編纂を命じたのは「清朝の康熙帝（女真人）」で編纂したのは「漢人の学者」である。これに収納されている漢字類は中央では確かであったかもしれない。しかし現代中国の中でも地域によっては北京人が読めない漢字が多く存在する。

中国の版図内でそのような漢字の存在が許されてきたのなら、一時期中国の準属国であった日本においてもしかるべきであろう。その意味で国字は中国の一地域において作られ利用されてきた漢字そのものといえるだろう。

この著作の著作権は岡和男に帰属します。

© Kazuo Oka 2000